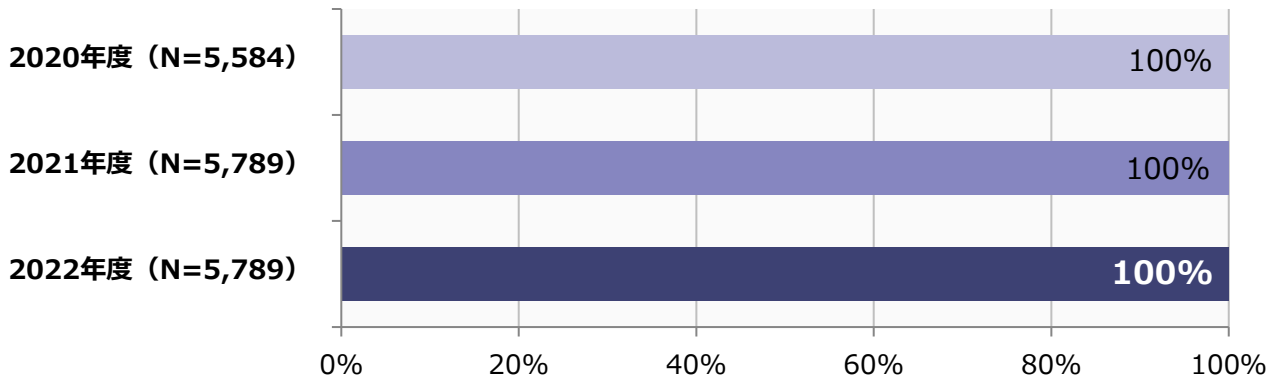


細胞診標本のダブルチェック

病理診断の重要な分野である細胞診断における精度管理の状況を示す指標であります。この指標の高い数値を維持することは、単に診断報告書の精度の向上だけではなく、検体の採取、標本作製、鏡検、報告、報告書の管理や病理組織診断の整合性の検証も含め一連の細胞診業務が複数の専門家の相互確認によりの確に実施されていることを意味します。当院の病理診断科は日本臨床細胞学会の細胞検査士認定精度また細胞診専門医制度において、それぞれ日本臨床細胞学会認定施設および教育研修施設になっており、これらの認定更新のために定期的に業務内容の確認、資格保持者の維持や技量の向上に関する取り組み、そして外部サーベイランスへの参加を継続しています。適切に検査室の運営、精度管理が維持され、また教育研修活動も重視されていることを担保する指標と言えます。



当院値の定義・算出方法

分子： 細胞診を実施した件数
分母： 細胞診標本を2名以上の細胞検査士あるいは細胞診専門医が鏡検したのちに最終報告を行った件数

$$\frac{\text{分子}}{\text{分母}} \times 100 (\%)$$

※グラフ中のN数は分母の値を示している。

結果の考察と今後の取り組み

例年通り100%の達成率が可能でした。細胞診業務が順調に遂行され精度管理も適切に行われていると言えます。高い達成率の維持のためには、練度の高い複数の細胞検査士が診断業務に携わる必要があり、各領域の急速な進歩に対応するための生涯教育も欠かせません。がんゲノム医療のための遺伝子パネル検査でも細胞診やセルブロック検体の利用が拡大しており、ROSE (rapid on-site evaluation)と言われる検体採取の現場に立ち会う様式での判定業務の重要性も増しています。高度医療をサポートするために最新の知識、技術を更新していく必要があり、細胞検査士と細胞診専門医とも最新の動向に注視しながら、細胞所見からの確かつ有用な臨床情報を抽出できるよう業務体制の整備や個人の研鑽、院内の各部署とも連携に努めています。細胞診スクリーニング時のダブルチェック体制は、より精度の高い細胞情報を判定医に提供できるため、診断精度の向上だけではなく、多数の組織診も担う病理医の負担軽減にも役立っています。細胞診業務、臨床検査技師としての業務は質、量ともに増大傾向にあります。近年はゲノム関連業務の拡充も見据えた認定病理検査技師の受験合格者も増えるなど、検査室メンバーの研鑽が続いています。働き方改革との整合性も求められ、より業務の効率化を図る必要性もありますが、引き続き、高い業務水準を維持出来るよう、業務環境の整備、スタッフの育成、あるいはスタッフ個人の教育研修機会の拡充に努めていきたいと思っております。

文責：病理診断科主任部長
加藤 誠也